元のテキストをもとに、次の方針で整えます。
- 岡野さんご本人の言葉やエピソード、話の順序をできる限り維持する
-「えー」「あの」などの口癖や重複は、読みやすさを損なわない範囲で整理する
- 音声認識の誤りと思われる箇所は、文脈から確実に判断できる場合のみ修正する
- はっきり聞き取れない内容は、勝手に補わず、必要に応じて「（聞き取り不明）」とする
- 参加者の感想や質疑応答は、岡野さんの講演本文と区別する
講演の内容を損なわないよう、長くなりますので何回かに分けてお送りします。まずは第1部です。

岡野誠さん 講演録（第1部）

※元の文字起こしに沿って、話し言葉の雰囲気を残しながら文章を整えています。元データの冒頭が話の途中から始まっているため、最初の一文は原文の範囲で整えています。

1. 壊れていたのではなく、エンジンのかけ方が違っていた

そこから僕は、「自分はダメな人間なんだ」「何もできない人間なんだ」と思うようになり、人と関わらずに生きていくようになった経験があります。

ですから、孤独や苦痛のつらさは、非常によく理解しています。

僕は30歳のときに借金で失敗し、うつ病になりました。それと同時に、その苦痛を埋めるために、いろいろな依存するものにはまってしまい、依存症にもなりました。30代には、そうしたさまざまな苦しみが起きた人生でした。

ですから、今の子どもたちがスマートフォンやゲームに依存している様子を見ると、僕は単なる依存では済まないような恐怖を感じるんです。

なぜなら、苦痛を抑えるためにやっているので、なかなか抜け出せないからです。自制がきかない世界にいる子どもたちを見たとき、「果たしてこの子たちは、10年後に大丈夫なんだろうか」と思います。

僕のように苦しむことになるんじゃないか。そんな心配を持っています。

僕自身も、本当にできないことがたくさんありました。意味が分からないと、全然動けないんです。

「まずやってみたらいいじゃん」という言葉が、僕にとっては一番つらかったんです。

何を見ても、目からの情報が記憶に入らない。そして、メモを取ると、今度はメモを取ったことで忘れてしまう。

そういうふうに、発達の状態にいろいろなちぐはぐさがありました。

ただ、唯一、耳から入ってくる情報だけは理解できるという状態だったんです。

当時は、ここまで説明してくれる世の中ではありませんでした。ですから、自分は病気だったんだと、ずっと思っていました。

そんな僕が借金から立ち直ることができたのは、メンターと出会ったことがきっかけでした。

その方から、「エンジンのかけ方」を教えてもらったんです。

「こんなふうに使うといいよ」と、自分の特性を社会に活かす秘訣を教えてもらいました。

そこで、僕はようやく気づいたんです。

自分には能力がなかったわけではない。みんなとは、乗り物が違ったんだ、と。

そこから、人生をやり直すことができました。

つまり、壊れていたのではなく、エンジンのかけ方が違っていたということです。

2. 能力がないのではなく、力を発揮できる条件が整っていない
では、僕たちは実際に子どもたちをどのように見ているのか。

例えば、学校では全然集中できない、集団の中に入れない、動けないという子どもたちが、今はたくさんいます。

では、その子たちに本当に能力がないのでしょうか。

そうではなくて、能力を発揮するための条件が整っていないのではないか。僕たちは、その方程式を探していきます。

学校では集中できないけれど、違うものにはものすごく集中する子どもがいますよね。

もし本当に能力がないのであれば、何にも集中できないはずです。

でも、何か別のものには集中できるのであれば、その子には能力があるわけです。だからこそ、力を発揮できる条件を探すべきなんです。

集団の中では動けないけれど、ある場所なら動けるという子もいます。

環境や能力、役割など、いろいろな条件が掛け合わさることで、その子の力が発揮されるようになります。

その子に応じた方程式をつくってあげることが大事なんです。

ですから、できないからといって、できない部分を支援して膨らませていけばいい、ということではないと僕は思っています。

その人の能力がオンになる条件を、何か一つ探してあげる。

これが、支援のスタートだと思っています。僕自身も、そこからスタートしました。

3. 本人・家庭・社会の三者が変わる
僕はこの10年間、小中学校や大人の方々も含めて、約1万人以上の方の前でお話ししてきました。その中で、社会につながり、自立していった方々も約500人います。

その中から、一つ事例をお話しします。

エンジンのかけ方を見つけ、環境を設計して、その子に合った方程式をつくっていく。そうすると、本人の中で変化が起きます。

それまで「自分はダメな人間なんだ」と思っていた子が、「自分にもできることがあるじゃん」と思えるようになる。

さらには、「自分には、周りの人よりもずば抜けているところがあるんじゃないか」と気づくようになります。

まず、本人の自分自身に対する見方が変わるんです。

すると、その子を見ていた親御さんも、「あれ？　自分は、この子のことを変なふうに見ていたのかもしれない」と気づくようになります。

本人の見方が変わり、親御さんの見方も変わる。

そして最後に、「自分は社会の役に立てるんじゃないか」「社会に出ていったほうがいいんじゃないか」という段階につながっていきます。

ただ、子どもだけを変えようとしても、なかなか動きません。親御さんだけが勉強しても、なかなか変わりません。そして、社会だけが受け入れる準備をして待っていても、それだけでは十分ではありません。

本人、家庭、社会。

この三者の見方や関わり方を変えていかないと、社会との接続は難しいのかなと思っています。

そして、僕が一番大事にしているのは、エンジンがかかるということは、単に行動が変わることではない、という点です。

自分自身の見方、つまり、自分をどう捉えるかが変わる。

そして、挫折したときの選択肢が増えるんです。

これが、僕の行っている志教育の一番の柱になる部分です。

4. 志を立てることで、選択肢が広がる

志を立てるメリットは、志を立てることそのものにあるわけではないと、僕は思っています。

志を立てることによって、選択肢が広がるんです。

つまり、夢ができるということです。

ですから、夢をつくろうとするのではなく、まず目的を持つ。

目的を持つと、目標が立つ。

そういう流れだと考えています。

5. 社会にある「空白」を埋める仕事
僕たちが福島で何をやっているのかと聞かれたら、最近は一言で「社会の空白を埋めています」と答えています。

いわゆるグレーゾーンと呼ばれる子どもたちの能力と、企業が困っていること。その見えにくい部分をつなぐ仕事です。

ところが、この見えにくい部分をつなぐインフラが、社会にはまだ十分にありません。

勉強ができて、学校にも通えた子どもたちが働ける仕組みはあります。

でも、学校の勉強についていけなかったり、自分の能力が分からなかったりする人たちが、社会につながるための仕組みは、十分に存在していません。

僕は、そこを「空白」と呼んでいます。

この空白を埋めるための場所として、活動しているんです。

家庭と社会の間に、小さな溝がある。

支援と自立の間にも、溝がある。

子どもの特性と、社会のニーズの間にも、空白がある。

そうした隙間に落ちてしまう人たちがいます。

そして、その穴にはまった経験のある人は、どんな穴だったのかをよく覚えています。

僕自身が、ずっとその穴にはまり続けてきた人生でした。だからこそ、同じように穴にはまってしまっている人たちの存在が、よく見えるのだと思います。

まだ十分な仕組みがない場所に、橋を架ける。

それが、僕の仕事です。

岡野誠さん 講演録（第2部）

6. 大切にしている四つの教育
今日の冒頭でもお話ししましたが、僕が大切にしている四つの教育があります。

この四つを主軸にして、子どもたちだけではなく、大人の方々も、自立し、社会につながっていくことを大切にしています。

共同生活をしながらだからこそ、できることもあると思っています。

今は、適性診断など、自分自身を知るためのツールが世の中に増えましたよね。

生年月日から分かるものもあれば、性格や特性を知るものもあります。

自分のことが分かると、もちろんうれしい気持ちになります。

ただ、それを知って、ではどうしたらいいのか。自分を知ったあとに、その力を活かせる社会との接続が、まだ少ないんですよね。

子どもたちの場合で言えば、「発達障害ですよ」と言われて、その先どうしたらいいんですか、というご家庭からの相談が、僕たちのところにあります。

例えば、先生から「少し見守ってあげてください」と言われ続けて、もう5年。

いつまで見守ればいいんでしょうか。

その先がないんです。

では、その先をどうやってつくっていくのか。社会にある空白をどう埋めていくのか。

そのために、僕たちは四つの教育を大切にしています。

一つ目は、志教育です
何のために働くのか。何のために勉強するのか。

僕は、これがなくては教育は始まらないのではないかと思っています。

志を立ててから、夢を描く。

そういう順番です。

自分は何のために生きているのか。自分の人生を何に役立てていくのか。

その目的を持つことが、出発点になります。

二つ目は、特性教育です
自分自身が持っている才能や特性を知っていくことです。

自分には何ができるのか。どんなところに力があるのか。

そして、その特性を見抜いて、社会のニーズにつなげていく。

自分を知るだけで終わるのではなく、その力を活かせる場所につなげていくことが大切です。

三つ目は、自律教育です
ここは、今の子どもたちに少し足りていないのではないかと感じているところです。

それは、自由には必ず責任が伴うということです。

つまり、自分で選択したことには、その結果がやってくるということです。

子どもたちの中には、自由を与えられていても、自分で選択し、その結果を背負う練習をしていない子たちがいます。

自由と責任のバランスを学んでいないと、どれだけ才能を持っていても、社会の中で受け入れられることが難しくなってしまいます。

自分で選ぶこと。そして、その選択の結果に向き合うこと。

これを実際に経験しながら学んでいく必要があります。

四つ目は、社会教育です
志を持ち、自分の特性を知り、自由と責任のバランスを学ぶ。

そのうえで、最後に考えるのは、自分の行動で誰を喜ばせることができるのかということです。

自分は誰の役に立てるのか。

自分の力を、社会の中でどう活かしていくのか。

これを学ぶことが、社会教育です。

具体的には、働くことを体験しながら、自分の特性が活かされる場所と、そうではない場所を経験していきます。

その中で、自由と責任のバランスも学びます。

そして、自分は何のために生まれ、何のために生きていくのかを考えていくんです。

この四つの柱を押さえながら関わっていくことで、子どもたちも育ちやすくなるのではないかと考えています。

僕たちが目指しているのは、支援され続ける人生ではありません。

自分の力を活かして生きていける人生にすることです。

7. 学ぶだけではなく、実際の行動につなげる
ただ、四つの教育について学んだだけでは、人生は変わらないんですよね。

大切なのは、実際の行動につなげることです。

僕たちが大切にしているのは、次の四つです。

一つ目は、何のために生きているのかという問いです。

皆さんも、この地球に何をしに来たのか。

自分は何のために生きているのか。

これを一言で言えないと、子どもたちの前に立つことは難しいのではないかと、僕は考えています。

二つ目は、自分の力を何に使えるのかということです。

自分の人生の使い道を明確にしていく。

自分が持っている力を、何のために使うのかを考えることです。

三つ目は、自分で選び、その結果に向き合えているのかということです。

自分で選択する。そして、その結果を引き受ける。

これを実践の中で学んでいきます。

四つ目は、自分の行動で誰を喜ばせることができるのかということです。

自分の力を使って、誰かの役に立つ。

この四つを、実際の行動につなげていくんです。

僕たちが渡したいのは、知識を増やすことだけではありません。

自分の人生を自分で動かせる力です。

自由を与えられるだけではなく、自由を扱える人間になる。

自分の人生を、自分で扱える力を身につけていくこと。

それが、僕たちの目指しているところです。

8. なぜ、この仕事を続けているのか

では、僕自身が、なぜこんなにややこしい仕事を10年も続けているのか。

すごくおせっかいな仕事なんですよ。

頼まれてもいないのに、子どもたちの持っている資源を見つける。

頼まれてもいないのに、中小企業が困っていることを言葉にする。

そして、その二つをつなげて、社会貢献につなげていく。

本当におせっかいなおじさんだと思います。

では、なぜそれができるのか。

僕にとっては、理由は一つです。

自分自身の過去を、浄化していくような感覚があるんです。

僕は、本当に苦しかったんです。

自分が社会の中でうまくいかず、穴にはまり続けていた頃は、自分に役割があるとも、生きている意味があるとも、なかなか思えませんでした。

そんな人生が、40年くらいありました。

でも、今になって思うんです。

「ああ、生きていてよかったな」と。

「あのときの苦しみが、今、誰かの役に立っているな」と。

子どもたちの力になればなるほど、過去の自分が喜んでいるような感覚があります。

周りと同じことができなかった。

同じルールをなかなか守れなかった。

そんな自分を、僕はダメだと思っていました。

でも、誰にもなかなか理解してもらえなかったんですよね。

だからこそ、今、同じように苦しんでいる子どもたちを見ると、何かできることがあるのではないかと思うんです。

過去の自分が苦しんできたことを、今の子どもたちのために活かす。

僕にとって、この仕事には、そういう意味があります。

9. 自分をダメだと思っていた中学2年生の女の子
具体的な事例を一つ、お話しします。

僕は月に1、2件くらい、全国のご家庭を訪問しています。

小学生、中学生、高校生の子どもたちの中には、「自分はダメなんだ」と思い、布団にくるまってスマートフォンを見て、部屋からも出てこないという状態の子がいます。

そういう子どもたちを心配した親御さんが、僕を呼んでくださるんです。

もちろん、本人は話すつもりなんてありません。

そこに、こんなチャラいおじさんが来るわけですから、怖いですよね（笑）。

最近、ある中学2年生の女の子のところに行きました。

僕が行ったとき、その子は泣きながら暴れていて、「絶対に話なんかしない」と言っていました。

でも、僕が5分くらい話をしたら、涙が止まったんです。

そして、15分くらいしたら、今度は違う涙が出てきました。

その子は、自分のことをダメだと思っていたんです。

自分の感覚が周りとずれている。だから、自分は病気なんだと思っていた。

でも、僕は「いや、違うんだよ」と話しました。

「逆に、その特性を活かせる仕事もあるんだよ」と。

そういう話をしていくと、その子の目がだんだんキラキラしてきたんです。

30分くらいした頃には、一緒に話ができるようになりました。

結局、1時間くらい話をしました。

そして、僕が帰るときには、その子がお出迎えまでしてくれたんです。

その2週間後、本人から「岡野さんのところに行ってみたい」という話があり、福島に来てくれました。

そして、元気になっていったんです。

もちろん、その子はまだ中学生なので、すぐに就労につなげるというわけにはいきません。

ただ、もしこれが成人している人だったら、そこから社会に出ていくまでのスピードも変わってくると思います。

エンジンさえかかれば、その人は動き始めることができるんです。

だから、まずは学校に行くことや、働くことを目標にする前に、エンジンをかけることが大切です。

そして、エンジンがかかったら、その人がどんな乗り物なのかを教えてあげる。

まずは、その人自身が、自分はどんな人間なのかを知ること。

僕は、それが一番大事だと思っています。

以上です。

・・・・・・・・・・・・・

※この第2部は、元の文字起こしの該当箇所をもとに整えています。誤認識と思われる表現は文脈に沿って修正し、話し言葉の重複などを整理しています。逐語的な完全再現ではありません。

ここまでが講演の中心部分です。

岡野さんのお話の特徴は、ご自身の経験から出発し、四つの教育を提示し、実際の子どもとの関わりへとつなげているところですね。

次は、講演後の質疑応答や参加者との対話部分を、岡野さんの発言と参加者の発言を分けて整えていきます。

岡野誠さん 講演録・続編

質疑応答と参加者との対話

1. 中学2年生の女の子の事例を受けて

講演の中で岡野さんは、自分を「ダメな人間だ」と思い、部屋から出られなくなっていた中学2年生の女の子について話しました。

最初は泣きながら「絶対に話さない」と拒んでいた女の子が、岡野さんの話を聞くうちに涙が止まり、やがて表情が変わり、自分から話せるようになったそうです。2週間後には、自分から「岡野さんのところに行ってみたい」と希望し、福島を訪れました。

岡野さんは、学校へ行くことや働くことを最初の目標にするのではなく、まず本人の「エンジン」をかけ、その子がどんな力を持っているのかを知ってもらうことが大切だと話しました。

2. 家庭への訪問相談はお願いできるのか

参加者・佐藤ゆかりさん
岡野さんが月に1、2件ほど家庭を訪問しているという話を聞き、自分の家庭にも来てもらえるのかと質問しました。

岡野誠さん
「もちろんです」と答え、相談方法について案内しました。

そのうえで、福島の施設に来なければ自立できない、特性が分からないということではないと説明しました。Zoomや電話、訪問などを通して本人のエンジンをかけ、自分で学校へ行く、自分で働くということにつながるのが大切だと話しました。

仕事や会社へ直接つなぐ段階になれば、その支援もできるとのことでした。連絡は北見俊則さんを通じて行うことになり、島﨑恵美さんも「私、つなぎます」と応じました。

3. 支援の対象となる年齢について

参加者・柏木法子さん

支援の対象は何歳までなのか、年齢について質問しました。

岡野誠さん
「僕より下です」と、ユーモアを交えて回答しました。

年上の人は自分にとって対応が難しいため、という説明もありました。現在は45歳の方もいるとのことで、岡野さん自身の年齢が上がるにつれて対象となる年齢の幅も広がっていく、というやり取りになりました。

4. 自分の特性を知るには、どうすればよいのか
参加者・森岡田まゆみさん
自分の特性を知る方法について質問しました。

岡野誠さん
岡野さんは、すぐに理解しやすい方法として、逆説的に「できないことを知ること」だと話しました。
できないことを、できなくてもやり続けていたときに、ぽろんとできることが存在するんですよね。

岡野さん自身も、できないことをたくさん経験してきたからこそ、「これならできる」というものに気づけたといいます。

できないことを最初から避けてしまうと、自分にできることも分からなくなってしまう。だからこそ、まずは挑戦し、本当にできないことを知っていくことが第一歩だと話しました。

また、成功と失敗そのものよりも、その間にある「克服すること」が大切だと説明しました。

一人で挑戦していると、失敗したときに誰にも知られず、ひそかに挫折してしまうことがあります。しかし、岡野さんたちは本人と一緒に生活するからこそ、落ち込んでいるときには背中を押し、調子がよいときには少し引き戻すなど、その人に合わせて関わることができます。

成功と失敗を繰り返しながら、挑戦し、克服していく。その過程を大切にしていると話しました。

5. 初対面の子どもの心を、どうやって開くのか
参加者・中川正成さん
自分を否定し、自暴自棄になっている子どもたちと関わる難しさに触れたうえで、岡野さんが初めて会う子どもの心を短時間で動かせるのはなぜなのか、質問しました。

岡野誠さん
岡野さんは冗談を交えながら話したあと、自分が意識していることを説明しました。

人生では、起きた出来事そのものと、その出来事をどう解釈するかということが重要です。しかし、ものの見方や解釈を学びすぎると、かえって事実が見えなくなることもあるといいます。

そのため、岡野さんは「事実と解釈を分離させる」ことを意識しています。

相手がどのような言葉を口にしても、その言葉だけに引きずられず、「この子の特性はどこにあるのか」という視点を持って接する。

「何とかしてあげたい」という気持ちを前面に出すのではなく、少し距離を置いて相手を観察

する。そうすることで、自分も感情的にならず、相手も感情的にならずに対話ができる。それが自分の強みなのではないか、と話しました。

6. 子どもと社会をつなぐことの大切さ

参加者・谷藤さん

谷藤さんは、教育の世界では、子どもが将来社会へ出ていくための「出口支援」の話がタブー視されることがあると語りました。

しかし、子どもたちは必ず大人になり、社会へ出ていきます。その接続を考えずにいてよいのか、という問題意識を持っているとのことでした。

特に、不登校の子どもや特性のある子どもたちには、社会の中核を担えるほどの才能があると、現場で実感しているそうです。

フリースクールなどで出会う子どもたちの力を社会につなぎ、企業と直接つなぐ仕組みをつくりたい。そして、その可能性を社会に示したいという思いを話しました。

岡野誠さん

岡野さんは、教育についての理論を先に出すと、反論を受けることもあるため、自分はまず実績を示すようにしていると説明しました。

企業が実際に動いた数や、どのくらいの経済効果が生まれたかなど、実証をもとに伝えることで、社会との接続の必要性を理解してもらいやすくなると話しました。

7. 親の関わり方と、社会全体のあり方

北見俊則さん

福島校や北海道校の子どもたちと話した経験から、自分で決めることをしてこなかった子どもたちがいると語りました。

親が子どものためを思って何でも決めてあげると、子ども自身が選択し、決断し、その結果に責任を持つ経験が少なくなってしまうことがあります。

だからこそ、子どもが自分で選び、自分で決め、失敗してもくじけずに次へ進める環境が大切なのではないか、と話しました。

岡野誠さん

岡野さんは、本人・家庭・企業という三者がそろわなければ、この教育は成り立たないと説明しました。

親が先回りしてしまうことだけを原因と考えてしまうと、物事をうまく捉えられなくなるといいます。

親も、そうしたくてそうしてきたわけではなく、一生懸命に子どもを育ててきた結果なのです。

だからこそ、親を責めるのではなく、なぜそうした状況になったのかを考える必要がある。背景には、社会全体の風潮や、人と人とのつながりが分断されてきたこともあるのではないか、と話しました。

柏木法子さん
社会の変化に親たちがどう適応していくのかが、これからますます問われる時代になると述べました。

そのうえで、親自身が自覚を持ち、社会や文化をつくる側になっていくための教育を、親同士で進めていく必要があると語りました。

参加者の皆さんから寄せられた感想
講演と対話の後半では、参加者の皆さんが、それぞれの経験や仕事、子育てと結びつけながら感想を共有しました。

- 三本久江さんは、幼稚園で個性豊かな子どもたちと接する日々を振り返り、自由と責任のバランスを育むことの難しさを語りました。講演で聞いた具体的なエピソードを、仕事にも生かしたいと話しました。
- 福田雪絵さんは、お子さんが寝食を忘れるほどボードゲームの戦略を考えられるという特性を紹介し、社会のニーズがあれば声をかけてほしいと話しました。
- 小松隆さんは、教育現場で目指す理想と実際との間にギャップがあると感じていることを語り、子どもたちのありのままを受け入れ、一人ひとりの幸せを一緒に考える姿勢の大切さに触れました。
- 細貝久美子さんは、できないことをできるようにして平均的な人材を育てるという従来の教育観を振り返りました。そして、人に合わせて人材をつくるのではなく、その人が生き生きと働ける仕事や環境をつくるという考え方に、目から鱗が落ちる思いがしたと話しました。
- 富永さんは、岡野さんの人生に感動したこと、そして志教育を通して人が変わる可能性を感じ、自分も志教育をしっかり学びたいと語りました。
- 黒川美穂子さんは、「あなたはどうしたい？」「あなたはどうなりたい？」と問いかけてもらえる関係性の大切さを語りました。また、子どもたちを見るときに、その姿の中に自分自身の苦しかった経験のかけらを見るという話に心を動かされたと話しました。
- 小室博道さんは、子どもたちを社会の資源として捉えるという話を受けて、自分には何ができるのか、次にどう行動すべきかを考えるきっかけになったと語りました。
- 赤嶺達也さんは、子ども・家庭・社会の三者を同時に動かしていくという考え方について、これまで考えていたことが具体的な形として見えてきたと話しました。
- 平石妙子さんは、同じ志を持つ人が増えていることをうれしく感じたと話しました。
- うんのゆりこさんは、まだ学び始めたばかりなので、これからもっと学んでいきたいと語りました。
- 祈さんからの感想
祈さんも、講演を受けて次のように語っています。
本当にありがとうございます。子どもたち、若者たちは本当に宝だなっていうことを、改めて感動の中で体験させていただきました。

自分の子育てはもうとうに終わっているんですけれども、自分の子どもだけじゃない。本当に世界中の子どもたちに、志共育も改めて届けたい！と実感させていただきました。

この発言は、講演の学びを、目の前の子どもたちだけでなく、世界中の子どもたちへと広げていきたいという思いを伝えるものでした。

講演後の岡野さんと北見さんの対話
参加者の皆さんが退出した後、運営スタッフとの振り返りが行われました。

岡野さんは、自分にとって日々話している内容であり、あまり考え込まずに話せるほど身近

なテーマになっていると語りました。その一方で、講演の機会をいただいたことへの感謝も述べました。

また、運営については、役割分担がしっかりしており、進行も上手で話しやすかったと評価しました。

特に、イベントは講師だけで成り立つものではなく、主催者やファシリテーターがどのように場を回すかが大切だという趣旨の話をしていました。

北見さんは、これまでゲストとして登壇した方々と、その後もつながり続けられる仕組みをつくりたいと話しました。岡野さんも、マネージャーの中村さんとの連携を提案し、今後の協力について前向きに応じました。

講演録の結び

今回の講演と対話で繰り返し語られたのは、子どもを「できない存在」として見るのではなく、その人が力を発揮できる条件を探し、本人・家庭・社会をつないでいくことの大切さでした。

岡野さんの話は、特性を知ることだけで終わるのではありません。挑戦し、失敗し、克服する経験を重ねながら、自分の力を社会の中で生かせるようにする。そのために、本人だけでなく、家庭や企業、周囲の大人たちも変わっていく必要がある、というメッセージでした。

そして、参加者の皆さんの感想からも、子どもたちの可能性を信じ、その力を社会につなぐことが、それぞれの仕事や活動、そして志教育の実践につながっていく様子が伝わってきました。

※この続編は、提供いただいた文字起こしをもとに、発言の趣旨を保ちながら読みやすく整理したものです。録音の逐語的な完全再現ではなく、音声認識の誤りや聞き取りにくい箇所は、確認できる範囲で扱っています。